

## 原 著

### 保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究② — A市の公立保育所に勤務する保育士がかつて担当したことがある障がいについて—

A study of specialty when the nursery teachers take care of Developmental Handicapped Child ②  
— About the Handicapped that has been accepted before in nursery teachers works for public day-care center in A city —

松尾 寛子

**要約:**現場で働く保育士が、障がいのある乳児・幼児・児童を担当する際、自らの保育の技術や知識に悩み、試行錯誤を繰り返しながら保育を行っているということは以前からいわれていることではある。

しかし授業として開講されている演習「障がい児保育」の内容だけでは、多岐にわたる障がいをとうてい網羅することはできないため、保育士が悩みながら保育を実施しているということは予想されることではある。

そこで、演習「障がい児保育」の授業内容について、保育士養成校出身者が現場で保育士として働くようになった際、障がいのある乳児・幼児・児童を保育・教育するにあたり、自らの保育の技術や知識の基礎的な能力について、試行錯誤するのではなく、明確な知識と対応をもつことができるのかについて、いかに効率よく、授業内で教授していくかということを探ることを最終目的とするために、2010年にA市において障がいのある子どもを保育することに関するアンケート調査を実施した。本研究ではかつて担当したクラスに障がいのある子はいたかどうか、どのような障がいのある子どもがいたのかに限定し考察した。

その結果、かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいなかったと回答した保育士は121名中16名(13.2%)おり、いなかったと回答した保育士のうち、5年未満の保育士のしめる割合は12名(75.0%)であった。保育の経験年数を経過するにつれて、多くの保育士が、障がいのある子どもの保育を経験するという、30年以上保育を経験しても、障がいのある子どもを担当することがない場合もあるということが明らかになった。

**Key Words:** 障がい児保育, 統合保育, 保育士, 実態調査

#### 問題と目的

保育士養成校における障がい児保育の授業内容について、理論的なものから実践的なものまで、かつ多領域にわたる内容で構成されており、授業者の意図や自身の保有する専門性に応じて特定の内容を選択して授業を構成されている(真鍋2009)<sup>(1)</sup>。特別な支援を要する園児は多くの幼稚園や保育現場に在籍しており、指定保育士養成施設を卒業した学生が将来、保育士資格を生かして就職した際、障がいのある乳児・幼児・児童とかわることは容易に予想される。

また、障がいについて、ある程度の知識理解はあっても、実際のかかわりの中で不安を抱くこともあり、授業で特に学びたいことについては、コミュニケーションの

とり方、症状、生活援助全般である(脇2009)<sup>(2)</sup>との結果が導き出されていることから、多くの保育士は、障がいのある子どもとかわる際の不安要素は、知識だけではないということが導き出されている。

また、実習で発達障がい児とかわる上で、多くの学生がコミュニケーションのとり方や自らの知識、生活援助全般や他の園児への対応について不安を抱いている(脇2009)<sup>(3)</sup>ということから、実習でも障がいのある子どもとかわるを持つということがあり、その対応に不安を抱いているということがわかる。

これらのことから、保育士養成校では、障がい児保育の授業内で、障がいのある子どもに関しての学習を深めているにもかかわらず、大学での学習は果たして現場に対応できるものであるかということに疑問を抱いた。

松山(2010)<sup>(4)</sup>は、発達障がいのある幼児に対して、保育所において適切な保育が行われることが求められる

2011年11月30日受付／2012年1月18日受理  
Hiroko MATSUO  
関西福祉大学 社会福祉学部

と述べており、発達障がい児は集団保育の中で、他者とのコミュニケーションを適切にとることができないことや、言語理解等の認知能力に関する障がいがあることが問題視されるため、保育士は発達障がいのある子どもとのコミュニケーションを、さまざまなことに留意しながらとっており、その際、子どもの認知能力の程度を把握しておくことが不可欠となると述べている。

松尾 (2011)<sup>(5)</sup> は、A市の障がい児の受け入れ状況に着目して、実態を明らかにした。そこでは、2010年8月現在、担当クラスに障がいのある子がいると回答した保育士は24.0%、障がいの疑いがあると回答した保育士は0.8%いた。受け入れているクラスの子どもの障がいについては、知的障がい38%、自閉症が31%を占めており、中村 (2003)<sup>(6)</sup> の「障害幼児の内訳」と同様に、保育所にて受け入れている上位2つの障がい名と同じであった。

また、松尾 (2009)<sup>(7)</sup> の結果より、保育士養成校に入学してくる学生自身がかかわった障がい児の中で、自閉症児、ダウン症児、知的障がい児が上位に挙がり、さらに知っている障がい名のうち、上位3つのうちに、知的障がいと自閉症は含まれていた。

このことより、現在保育所に在籍している、支援を要する子どもだけではなく、保育士がどのような障がいも多く直面しているのかを知ることによって、障がい児保育の授業内で、取り上げなければならない障がいがあると考えた。

本研究においては、2010年にA市公立保育所に勤務する先生方に対して、アンケート調査を実施したもののなかから、かつて担当したクラスに障がいのある子はいたかどうか、どのような障がいのある子どもがいたのかに限定し考察した。

## 1. 先行研究概観

松尾 (2010)<sup>(8)</sup> によると、A市の保育士121名のうち、クラスの中に障がいのある子どもがいると回答したのは29名(24.0%)、クラスの中に障がいのある子どもはいないと回答したのは69名(57.0%)、そのうち1名(0.8%)は障がいの疑いあり、と回答していた。回答無しは23名(19.0%)だった。

担当している子どもの障がい種別について、121名中①知的障がい(軽度・中等度・重度)については、11名、②ダウン症については2名、③アスペルガー症候群については2名、④自閉症については9名、⑤視覚障がいについては0名、⑥聴覚障がいについては0名、⑦脳性まひについては2名、⑧ADHDについては4名、⑨その

他については6名が担当していた。

また、現場で働く保育士の不安を考えると、保育士養成校では授業内容をいかに充実させるかということ、保育現場で働く保育士へは、現職にありながら研修に出かける機会を多く設けられるようなシステム作りをしていくことが、早急な課題だと述べている。さらに、その研修内容も、より多くの障がいに対する知識や保育方法を獲得できるように、障がい特性を学べる研修や、あそびに関する研修、他児とのかかわりに関する研修、保護者支援に対する研修など、保育者による障がいに対する水準のボトムアップがはかられるようなものを多く盛り込む必要があると述べている。

松山 (2007)<sup>(9)</sup> は、軽度発達障がい児の保育経験の有無による、軽度発達障がい児とのコミュニケーションに対する認識の違いについて検討した。その中でも、有効回答371名中、軽度発達障がい児の保育経験があるものの271名(73.0%)、経験がないもの100名(27.0%)であり、保育経験年数が5年未満の保育士は、発達障がい児の保育経験無しは11.9%、5年以上10年未満の保育士は7.0%、10年以上20年未満の保育士は5.1%、20年以上30年未満は1.3%、30年以上は1.6%とあり、年数を経過するにつれ、多くの保育士が、軽度発達障がい児の保育経験を有することが読み取れる。

寺田ら (2008)<sup>(10)</sup> は知的障がい者入所更生施設で実習を行った学生に対し、アンケート調査を実施している。これによると、実習前と実習後の施設のイメージについて、上昇した学生は95%おり、実習後、施設への就職を希望する学生は60%いた。また、実習中つらかったこととして高い割合を示したのが、「利用児者とのコミュニケーション」で37%おり、「ノンバーバルコミュニケーションを学ぶことが重要ではないかと考える」と述べている。

山本ら (2002)<sup>(11)</sup> は、全国136か所の保育園に対し調査依頼を行った。「保育士に障がい児保育に関する専門性は必要だと思いますか」という質問では95.3%の人が「専門性を必要とする」と回答している。また、保育士養成に不足している障がい児保育の専門的教育については、「障がい児固有の発達特徴」が82.2%、親や家族への支援が78.3%、障がい児への特別な保育技能69.0%、障がい児に対する医療的ケアが58.1%が上位に挙がっていた。

自由回答では、「個々の子どもたちの発達段階を明らかにできる保育力の養成を」「いろいろな場面に柔軟に対応できる保育力の養成を」「障がい児保育にかかわる高い専門的教育を」「家族・地域社会・他の職域と連携

する力の要請を」「保育士を目指す学生自身の人生観・価値観を」という領域で回答を得ていた。

障がいのある子どもの在籍について、国公立の幼稚園では50.0%，私立の幼稚園では66.8%，公営の保育所では78.7%，私営の保育所では65.4%である（Benesse 次世代育成研究所）<sup>(12)</sup> という結果もあった。

これら5つの先行研究より、現在保育所では、約4人に1人の保育士が、障がいのある子どもとかかわっているという現実が見えてくると同時に、発達障がい児を保育した経験のある保育士は4人に3人いるということ、官民おしなべて70%以上の保育所で、障がいのある子どもが在籍しているという事実がわかった。また、保育士養成校に在籍する学生は、障がいのある人とかかわることにより、実習前よりイメージが上昇する人が多く、かわりを持つ中で、ノンバーバルコミュニケーションを学ぶことの重要性を感じるようになるということ、保育士は障がいについての専門性を必要とするため、保育士養成校では、「障がい児固有の発達特徴」「親や家族への支援」「障がい児への特別な保育技能」「障がい児に対する医療的ケア」を教授していかなければならないということが浮かび上がってきた。

## 2. 調査の概要

「保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究①」にアンケート実施方法等詳細は述べている。2010年7月30日A市公立保育所9園で働く正規保育士と8時間勤務のパート保育士121名にアンケートを実施した。アンケートの内容については、所属、現在のクラスの状況、過去のクラスの状況、実習の経験等学生時代のこと、保育士養成校に対する要望についての質問をした。本研究ではかつて担当したクラスに障がいのある子はいたかどうか、どのような障がいのある子どもがいたのかに限定し考察した。

## 3. アンケート結果

松尾（2011）<sup>(13)</sup> は、A市に勤務する保育士の勤務年数について Figure 1. のような結果を得ている。

Figure 2. に示しているように、アンケートの結果より、かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいたかという項目の中で、いなかったと回答した保育士121名中16名（13.2%）いた。記入無しは5名いた。

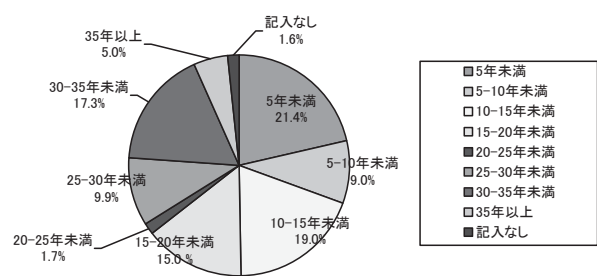


Figure 1. A市で勤務する保育士の保育士としての全保育勤務年数 (松尾 2011)

いなかったと回答した保育士の全勤務年数については、Figure 3. に示しているように、4か月（1名）、5か月（2名）、2年（4名）、2年5か月（1名）、3年（1名）、3年5か月（1名）、4年（2名）、10年（1名）、16年（1名）、30年（1名）、記入無し（1名）であり、5年未満の保育士のしめる割合は12名（75.0%）であった。また、かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいたと回答したのは100名（82.6%）いた。A市に勤務する保育士の全勤務年数の平均は回答があったものについては16.3年であり、保育士の経験年数によって、経験年数が浅ければ、障がいのある子どもを担当する機会が少ないという結果が導き出された。

これは、松山（2007）<sup>(14)</sup> が導き出した、軽度発達障がい児の保育経験があるもの271名（73.0%）、経験がないもの100名（27.0%）、保育経験年数が5年未満の保育士は、発達障がい児の保育経験無しは11.9%、5年以上10年未満の保育士は7.0%、10年以上20年未満の保育士は5.1%、20年以上30年未満は1.3%、30年以上は1.6%と、いう結果とよく似たものであった。保育の経験年数を経過するにつれて、多くの保育士が、障がいのある子どもの保育を経験するということが、30年以上保育を経験しても、障がいのある子どもを担当することがない場合もあるということが明らかになった。

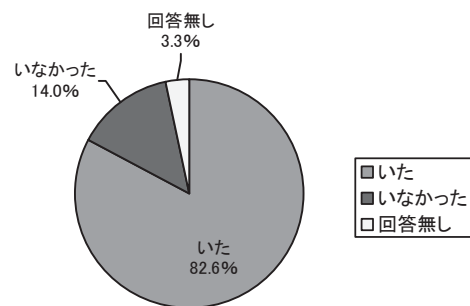


Figure 2. かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいたか

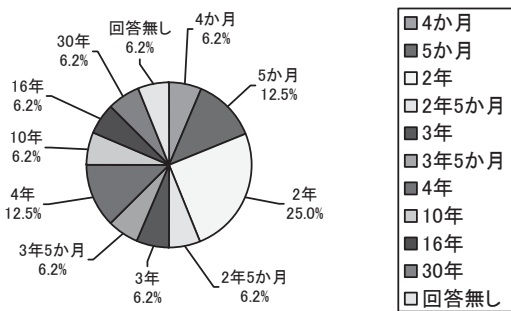


Figure 3. かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもがいなかったと答えた保育士の勤務年数

Figure 4. では、かつて担当した障がい種別について示している。アンケート内では、①知的障がい（軽度・中等度・重度）、②ダウン症、③アスペルガー症候群、④自閉症、⑤視覚障がい、⑥聴覚障がい、⑦脳性まひ、⑧ADHD、⑨その他、9項目で回答を求めた。かつて担当したことがある障がいについては、1人の保育士より複数の回答があった。①知的障がい（軽度・中等度・重度）については、47名、②ダウン症については47名、③アスペルガー症候群については36名、④自閉症については70名、⑤視覚障がいについては6名、⑥聴覚障がいについては7名、⑦脳性まひについては18名、⑧ADHDについては27名、⑨その他については12名いた。その他についてはソトス症候群、肢体不自由児、猫なき症候群、染色体異常、水頭症、二分脊椎、高機能自閉症、筋ジストロフィー、多動、奇形という回答があった。

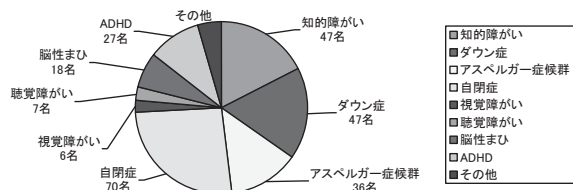


Figure 4. どのような障がいのある子どもがいたか

#### 4. 考察

山本ら（2002）<sup>(15)</sup> の調査でも 95.3%の人が、保育士に障がい児保育に関する専門性を必要としているという回答を得ており、保育現場から見る、保育士養成に不足している障がい児保育の専門的教育については、障がい児固有の発達特徴、親や家族への支援、障がい児への特別な保育技能が上位に挙がっていたところをみると、実際

の保育を実施する際に直面している困難さととらえることもできるだろう。

かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいたかという質問から、いなかったと回答した保育士は121名中16名で、全勤務年数が5年未満の保育士は12名いた。その一方で10年以上の保育士は10年（1名）、16年（1名）、30年（1名）と3名おり、勤務年数が長くなればなるほど、障がいのある子どもとのかかわりを持つ機会は多くなるものの、必ずかかわることになるということではないということも明らかになった。しかし、かつて担当したクラスの中に障がいのある子どもはいたと回答したのは100名（82.6%）いたということは、10年以上勤務しても、障がいのある子どもを担任することがないのは2.5%で、多くの保育士が勤務年数が長くなればなるほど、障がいのある子どもを担任する機会が増えるということがわかった。

また、勤務年数が長くなればなるほど、かかわる子どもの数が多くなるということから、多様な子どもとのかかわりがみられ、その中に障がいのある子どもも含まれるということになる。保育士は保育を実施する際に、クラス単位の集団を対象とした保育のみならず、一人ひとりの子どもに対しての個別へのかかわり、さらに他児とのかかわり、保護者へのかかわり、地域の子どものかかわりなど、業務は多岐にわたっているため、障がいのある子どもの保育や、障がいのある子どもの保護者とのかかわり、障がいのある子どもと他児とのかかわりなど、障がいのある子どもを取り巻くあらゆることに対する対応が求められる。

特に乳幼児期の子どもの保護者へのかかわりの中で、我が子の障がいを認めたくない気持ちに直面することもある。保育所での実態を話す際の、対応への大変さを実感している保育士もいるだろう。また、自ら取るべき行動を獲得しつつある段階の子どもとのかかわりため、子ども自身も年齢による生活経験の浅さから、集団行動を苦手とする子どももいる。このように、障がいのある子どもを取り巻くさまざまな対応が求められるのが、保育士である。

アンケート内で5年以上の保育経験がありながら、障がいのある子どもとのかかわったことがないと回答した保育士でも、保育の現場においては、担任以外の子どもとのかかわる場面や、カンファレンス等を通して全保育士が特定のケースに関して話し合いの場を持ったり、かかわり方を考えたりすることがある。障がいのある子どもを

担任していないからといって、全くかわりがなかったというわけではないだろう。

30年以上保育を行ってきて、障がいのある子どもを担当したことがないという回答もあったが、1年目の保育士でも、障がいのある子どもを担当することがあるということを周知した上で、障がい児保育の授業を展開していかなければならない。しかし、障がいがあるから、障がいがないからという視点で保育を行うのではなく、一人ひとりに応じた保育を行う視点を持つように、指導内容の中に組み込まなければならないが、山本ら(2002)<sup>(16)</sup>が行った調査にもあるように、現場で働く保育士は、障がい児保育に関する専門性は95.3%の人が必要だと思っているということ、保育士養成内では、障がい児固有の発達特徴、親や家族への支援、障がい児への特別な保育技能、障がい児に対する医療的ケアも含めた授業展開が必要であるということであるため、発達の特徴だけではなく、保護者への支援や技能も授業ないで盛り込んでいく必要があるということがわかった。

これらを踏まえて、①知的障がい、②ダウン症、③自閉症、④アスペルガー症候群、⑤脳性まひが上位に挙げられているため、少なくともそれらの障がいに関する発達特徴、親や家族への支援、保育技能、医療的ケアなどを障がい児保育の中で盛り込まなければならないということであるということが導き出された。

付記：本研究を進めるにあたり、さまざまなご協力いただきましたA市福祉部こども支援局酒井様、井尻様、関係職員各位、A市の保育士の先生方に感謝申し上げます。

- (1) 真鍋健(2009) 統合保育に関する専門的知識の獲得に関する研究-授業「障がい児保育」のシラバス分析を通して-。中国四国教育学会教育学研究紀要第55巻。409 - 413
- (2) 脇輝美(2009) 保育大学生における発達障害児に関する意識調査。別府大学短期大学部紀要(28) 123 - 131
- (3) 脇輝美(2009) 保育大学生における発達障害児に関する意識調査。別府大学短期大学部紀要(28) 123 - 131
- (4) 松山郁夫(2010) 発達障害のある子どもの支援に必要な知見。九州生活福祉支援研究会研究論文集 4(1) 27 - 38
- (5) 松尾寛子(2011) 保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究①-A市の公立保育所における障がい児の受け入れ状況について-。関西福祉大学14巻第2号。41 - 46

- (6) 中村哲雄(2003) 障害児の統合保育現場の課題-保育士へのアンケート調査結果より-。琉球大学教育学部障がい児教育実践センター。67 - 76
- (7) 松尾寛子(2009) 保育士養成校における学生の学習に対する意識調査-演習「障害児保育」の授業への取り組みを中心に-。関西国際大学第10号。209 - 216
- (8) 松尾寛子(2009) 保育士養成校における学生の学習に対する意識調査-演習「障害児保育」の授業への取り組みを中心に-。関西国際大学第10号。209 - 216
- (9) 松山 郁夫(2007) 軽度発達障害児とのコミュニケーションに対する保育所の保育士の認識。日本福祉大学社会福祉学会 福祉研究(96) 51 - 60
- (10) 寺田博行, 大野地平, 海老江康二, 宮本茂樹(2008) 保育士養成における施設養護実習の現状と課題-知的障がい者入所更生施設での実習から-。聖徳の教え育む技法 (3)。125 - 136
- (11) 山本敏貢, 鴨井慶雄, 新見俊昌, 広川律子, 竹内進, 山崎由紀子, 吉葉研司, 寺岡福子(2002) 『障がい児保育に対応できる保育士養成に向けてのアンケート調査』結果報告書。大阪千代田短期大学紀要(31) 113 - 134
- (12) Benesse 次世代育成研究所(2009) 「第1回幼児教育・保育についての基本調査報告書幼稚園編・保育所編」。研究所報VOL. 4. ベネッセコーポレーション
- (13) 松尾寛子(2011) 保育士資格取得者に関する障がい児保育の専門性についての研究①-A市の公立保育所における障がい児の受け入れ状況について-。関西福祉大学第14巻第2号。41 - 46
- (14) 松山郁夫(2007) 軽度発達障害児とのコミュニケーションに対する保育所の保育士の認識。日本福祉大学社会福祉学会 福祉研究(96) 51 - 60
- (15) 山本敏貢, 鴨井慶雄, 新見俊昌, 広川律子, 竹内進, 山崎由紀子, 吉葉研司, 寺岡福子(2002) 『障がい児保育に対応できる保育士養成に向けてのアンケート調査』結果報告書。大阪千代田短期大学紀要(31) 113 - 134
- (16) 山本敏貢, 鴨井慶雄, 新見俊昌, 広川律子, 竹内進, 山崎由紀子, 吉葉研司, 寺岡福子(2002) 『障がい児保育に対応できる保育士養成に向けてのアンケート調査』結果報告書。大阪千代田短期大学紀要(31) 113 - 134